富山大学人文学部　平成 29 年度卒業論文

性的少数者の描かれ方

―テレビドラマ分析より―

富山大学人文学部人文学科
社会文化コース　社会学分野
学籍番号　11410170
氏名　村本陽香

目次

第一章　問題関心 ……1
第二章　先行研究
　第一節　ゲイの女性的表現と男性性の喪失 ……2
　第二節　ゲイイメージの「ファンタジー化」 ……3
　第三節　「悲劇的結末」をたどる同性愛 ……4
　第四節　カミングアウトの困難さ ……5
第三章　調査概要
　第一節　分析の観点について ……6
　第二節　調査作品の選定 ……7
第四章　分析 ……9
　第一節　性指向・性自認に関する言及 ……10
　第二節　男性性/女性性に関する表現 ……13
　第三節　恋愛の成就 ……15
　第四節　パッシングとカミングアウト ……18
第五章　考察
　第一節　男女における非対称性 ……22
　第二節　異性愛と交錯する恋愛 ……24
　第三節　カミングアウトの壁 ……25
注釈 ……26
参考文献・参考 URL ……27
図表一覧
表 4-1　性指向・性自認に関する言及 ……12
表 4-2　男性性/女性性に関する表現 ……14
表 4-3　恋愛の成就 ……17
表 4-4　アウティングとカミングアウト ……21

第一章　問題関心

2015 年 11 月 5 日に東京都の渋谷区と世田谷区で、同性カップルに対して「パートナーシップ証明書」を交付する取り組みが始まった。この「パートナーシップ証明書」が発行された同性カップルは、婚姻に準ずる関係として公的に認められたということになり、さまざまな民間のサービスにおいて配偶者同等の扱いを受ける権利が保障される、というものである。取り組み開始日には、国内初の取り組みということで多くの注目を集めた。また、首都圏や関西圏を中心に行われてきたレインボーパレード[1]も年々大規模になってきており、性的少数者とされる人々を取り巻く環境が変化し、また、可視化しつつあると言える。

また同年、同性愛をテーマの一つとして大きく取り上げたテレビドラマ『偽装の夫婦』が放映され、大きな反響を呼んだ。主人公がかつての恋人であった男性と、この男性がゲイであることを隠すために偽装結婚をする、といった内容で、初回放送では 14.7%の高視聴率をたたき出した。このテレビドラマの他にも、様々なメディアにおいて同性愛や性的少数者を取り上げたコンテンツが近年多くみられ、多くの人々が関心を向けていることが窺える。このような社会の風潮の中で、同性愛や性的少数者とされる人々の存在をメディアはどのように捉え、描き、そして発信しているのだろうか。

本稿では日本のテレビドラマにおいて登場する性的少数者される人々に注目し、そのキャラクターの描かれ方を会話、物語の展開等から分析することでその描かれ方を探っていきたい。

第二章　先行研究

第一節　ゲイの女性的表現と男性性の喪失

巴(2014)は、2000 年代に放送されたテレビドラマを視聴分析する中で、ゲイのキャラクターは、ウエディングドレスやネグリジェ姿など女性の様な装いで描かれ、また言葉遣いや仕草においても、女性的な表現がなされていると明らかにした。これらの女性的表現は、ストーリーの展開とともにより強調され、ゲイキャラクターは「女性らしい存在」としてしばしば描かれており、その根底には製作者側の、ゲイとトランス[2]という異なるセクシュアリティの混同と、異性愛規範における「女性」的役割にゲイのキャラクターを当てはめようとする異性愛規範中心の考え方があると述べている。

また、ゲイのキャラクターはしばしば女性恐怖症や ED と結び付けられ、肉体的・精神的に男性に求められている機能に問題を抱えているキャラクターとして描かれていると述べている。巴はこれらの男性的な機能不全のことを「男性性の喪失」と呼び、いくつかの作品においては「男性性の喪失」によって「同性愛者になる」という構図が存在し、この構図において同性愛は異性愛規範から「逸脱」したものとして捉えられていることを明らかにした。

これらの点からゲイキャラクターは男性でありながら女性のように描かれる場合が多いことがわかる。その上で巴は、ゲイキャラクターが、メディアに登場することで「見える」存在になってきているものの、そのイメージが必ずしも正しいものや肯定的なものではなく、そのイメージを目の当たりにすることで、当事者にとっては自身のセクシャリティを否定的に見ることに繋がり、非当事者にとっても、誤った見方や情報を得てしまう原因となると述べている。

第二節　ゲイイメージの「ファンタジー化」

河口(2010)は、新宿二丁目について特集したあるバラエティ番組を分析した中で、あらゆるものが商品としての価値を持ち消費の対象となる社会において、ゲイのイメージやライフスタイルは、商品化される過程で多くの人が受け入れやすい肯定的なものに作り変えられる可能性があることを示唆した。河口(2010)ではこれを「ファンタジー化」と称している。ゲイのイメージやライフスタイルを「ファンタジー化」することで、ゲイを魅力的なキャラクターとして演出することが出来る。しかし「ファンタジー化」によってもたらされたゲイのイメージは、当然ながら実際のゲイのとは異なる幻想でしかなく、時には間違った認識が浸透してしまう可能性や、異性愛者による同性愛嫌悪の問題を隠ぺいしてしまう危険性があることも言及されている。

第三節　「悲劇的結末」をたどる同性愛

巴(2014)はテレビドラマを視聴分析する中で、登場するゲイキャラクターが特定の相手に恋愛感情を抱く時、恋愛が成就することなく終わる、「悲劇的結末」がパターン化されていると明らかにした。ゲイキャラクターが異性愛者の男性に恋愛感情を抱いていても、片思いのまま好意を伝えずに物語が終結したり、好意を伝えた場合においても成就することなく終わる作品が大多数を占めており、同性愛は「叶わないもの」として描かれているのである。これは、第一項でも述べられていた異性愛規範的な思考が制作者側の根底にあるために、その規範から「逸脱」しているとされる同性愛が成就しない結末がパターン化されているのであると巴は述べている。

以上の文献からメディアが描く性的少数者像は、しばしば実際の姿とは異なるものとして描かれており、また、視聴者に必ずしも正しいイメージや知識を与えるものではないと考えられる。このような描かれ方は今日においても継続してなされているのか、また、先行研究は同性愛のなかでもゲイに関する研究が多くみられたが、性別の異なるレズビアンやトランスジェンダーといったようなゲイ以外の性的少数者の描かれ方に関しても、同様の結論が出るのか、検証を行っていく。

第四節　カミングアウトの困難さ

NHK が 2015 年 10 月に LGBT[3] を含むマイノリティ当事者に行ったアンケート調査(出典：http://www.nhk.or.jp/d-navi/link/lgbt/　NHK オンラインより）によると、カミングアウトに関する質問に対して、周囲の誰にもカミングアウトを行っていないと回答した人の割合は全体の 6.2%にとどまり、カミングアウト[4]をした人数にはばらつきはあるものの、したことがあると答えた人が 9 割となっている。web 回答のアンケート調査であるために調査に参加した人の性別や年齢に多少偏りがあるとは推測されるが、このアンケート結果から性的少数者であることを誰にも話さずにいる人の割合は話していない人に比べて少ないことがわかる。

また、カミングアウトをした相手は誰かという質問においては「LGBT ではない友人」と答えた人が 82.6%、「LGBT の友人」と答えた人が 78.8%であるのに対して、「家族」と答えた人は 51.2%と約半数にとどまった。「職場・学校」と答えた人は 41.5%と「家族」よりも低い結果となっている。このことからおよそ半数の人が、最も身近な存在だと思われる家族や、職場の同僚などに対してはカミングアウトをし辛いと感じていることがわかる。このアンケート調査の分析を行った金沢大学准教授の岩本氏はこの結果について、職場や学校は日中の大部分を過ごし、社会との接点となる場所であるため、当事者がなかなかカミングアウトし辛いのではないかと述べている。また、この傾向は地方であるほど顕著であるとしている。

この統計結果から、実際に性的少数者として生きている人々の大半は周囲の人間と自らのセクシュアリティに関する情報を共有しているが、日々接する機会の多い家族などに対してはカミングアウトを避ける人も多いということがわかる。フィクションの世界であるテレビドラマのキャラクターにおいても実際の性的少数者達と同様に、周囲の人々にカミングアウトし、またその間柄によって相手を選ぶ傾向があるのかについても分析をして明らかにしたい。

第三章　調査概要

第一節　分析の観点について

テレビドラマの視聴分析を行うにあたり、予め三つの観点を設けその観点に関連するような台詞や描写を抜き出す形で調査を行った。一つ目の観点は、「性を強調するような表現の有無」である。先行研究である巴(2014)では、ゲイキャラクターが女性的な仕草や言葉遣いをする表現がみられたが、本調査で分析するゲイキャラクターの作品においても同様の結果が得られるのか、また、ゲイ以外のレズビアンやトランスジェンダーの作品においても女性的、あるいは男性的に強調された表現があるのか、台詞や登場人物たちの仕草などの描写から分析を行った。

二つ目の観点は、「対象キャラクターの恋愛とその結末」である。巴(2014)では、異性愛規範的に描かれる中で同性愛は「悲劇的結末」を迎えるとされていたが本調査で視聴する作品においても同様の結果が得られるのか、台詞やストーリー構成などに着目することで調査を行った。

三つめの観点は、「カミングアウトに至る流れとその範囲」である。なお本調査で視聴分析を行うにあたり、カミングアウトの描写があることを条件に含め視聴する作品を選定したため、カミングアウトの有無は観点の対象としない。第二章第四項で触れた、NHK のアンケート調査においては、友人に対してカミングアウトを行った割合が 9 割を超えている一方で、家族に対しては 5 割にとどまる結果となっていたが、テレビドラマにおいてはどのようなストーリー展開の中でカミングアウトがなされるのか、また誰に対してカミングアウトがなされるのかについてストーリー構成や登場人物たちのセリフ、またカミングアウトをされた側のキャラクターのその後の反応などにも注視しながら分析を行った。

第二節　調査作品の選定

本調査では、性的少数者のキャラクターが主要キャラクター、あるいは物語の展開の中で重要なキャラクターとして登場していること、また予め設定した観点に沿って分析を行うことが出来るよう、対象の性的少数者のキャラクターの、他者に対する恋愛描写とカミングアウトの描写がみられることを条件に作品を選定し、調査を行った。調査作品は以下の通りである。

＜調査作品＞
『偽装の夫婦』(2015)
『同窓会』(1993)
『ごめんね青春!』(2014)
『ラスト・フレンズ』(2008)
『トランジットガールズ』(2015)

以下、個々の作品の簡単なあらすじとその作品を選定した理由を記述する。

『偽装の夫婦』は 2015 年に放送されたテレビドラマで主人公の嘉門ヒロ（以下：ヒロ）と偽装結婚をする男性、陽村超治（以下：超治）が今回分析対象となるゲイキャラクターである。超治がかつて恋人関係だったヒロの元を訪れ、自分がゲイであることを母親に隠すために偽装結婚を頼むことをきっかけに物語が展開していく。最終的にはヒロとの婚姻関係を継続する形で物語は終結するが、その過程において異性愛者のキャラクターに恋愛感情を抱く描写やカミングアウトを行うシーンがみられた。主人公に次ぐ重要な役柄に対象キャラクターが位置していることや、「同性愛」がこのドラマにおいて一つのテーマとされており、それに関連する描写やセリフも多く見受けられたためこの作品を選出した。

『同窓会』は 1993 年に放送されたテレビドラマである。主人公である安藤風馬（以下：風馬）がゲイであることを隠して、折原七月（以下：七月）と結婚をするが、自らの性指向に思い悩んだ末にバイセクシュアル[5]の少年・丹野嵐（以下：嵐）と関係を持ってしまい、そのことがきっかけで周囲の人間関係が変化していく、といった内容である。この作品は、主人公がゲイキャラクターで物語の展開の中で同性愛が大きく描かれており、前述した観点での分析に適していると考え選出した。また、他の視聴作品と比べ放送年代が古く、年代差による比較分析の可能性があることや、同性愛者でありながら異性と婚姻関係を結ぶというストーリー展開が『偽装の夫婦』と共通しており、比較分析が期待できる事も選出した理由に挙げられる。

『ごめんね青春!』は 2014 年に放送された、高校を舞台にしたテレビドラマで、今回分析対象とするキャラクターは、主人公の原平助（以下：原）が担任を務めるクラスの生徒の村井守（以下：村井）である。犬猿の仲である男子校と女子校が合併するまでの道のり

を描くこの作品において、MtF[6]のキャラクターである村井は主要なキャラクターではないが、ストーリーの展開の中で村井のセクシュアリティが大きくかかわる回があり、また、カミングアウトや恋愛といった観点に関連する描写も見られることから選出した。

『ラスト・フレンズ』は2008年に放送された作品で主人公の一人がFtM[7]のキャラクターである。恋人からの暴力に苦しむ主人公藍田美知留（以下：美知留）が学生時代の友人である岸本瑠可（以下：瑠可）と再会し、瑠可の友人たちも交えてシェアハウスで共同生活を始めるといった内容で、DVやトランスジェンダー、セックス依存症など様々な性や恋愛の問題にスポットを当てた作品である。今回分析の対象となるFtMのキャラクターである瑠可はモトクロスの選手で、スポーツの世界における男女格差に思い悩む様子等が描写されている。恋愛描写やカミングアウトの描写も見受けられ、瑠可のセクシュアリティに関する出来事がストーリー展開に大きく関連していることからこの作品を選出した。

『トランジットガールズ』は2015年に放送された、義理の姉妹の恋愛を描いた作品で、日本では数少ない女性の同性愛を描いたテレビドラマである。父母の再婚がきっかけで義理の姉妹となった葉山小百合（以下：小百合）と志田ゆい（以下：ゆい）が、ゆいからのキスがきっかけで関係を深めていくといった内容である。レズビアンだと明言する描写はみられないものの、それまで異性愛者であった小百合に接近し、関係を深めようと働きかけているのはゆいであるが、カミングアウトなどのいくつかの観点においては小百合の視点で描かれていることから、本調査ではゆいだけに分析対象を絞らず、小百合とゆいの両方を分析対象のキャラクターとした。

以上が本調査で分析対象とした五作品である。セクシュアリティごとに分類すると、ゲイキャラクターの作品が二本、レズビアン・MtF・FtMのキャラクターの作品がそれぞれ一本ずつであり、先行研究で得られた観点を基にこれらのセクシュアリティの違いによる差異についても比較分析していきたい。

第四章　分析

分析は、第三章第一節で挙げた観点を基に作品を全話視聴し、ストーリー展開や全体の話の流れを注視しつつ、分析対象のキャラクターを中心に観点に関わると思われた描写や言動を抜き出し、観点ごとに他の作品との共通点や相違点を比較して分析を行った。

第一節　性指向・性自認に関する言及

第三章第一項で述べた観点を分析する前に、対象キャラクター達が自らの性指向や性自認をどう捉えているのかを分析することで、そのドラマがセクシュアリティをどのように位置づけているのかを明らかにしたい。

本調査で視聴分析を行ったすべての作品において、自らの性指向や性自認に対する言及がみられたが、その内容としては肯定的であるものと、否定的に捉えているもの、はっきりと言及されないものとの三つにわかれた。

まず、『偽装の夫婦』の超治は自身の性指向を肯定的に捉えているかのような発言が多くみられた。例えば第六話で、ヒロの友人である水森しおり（以下：しおり）の元夫がしおりの娘を奪いに来る場面で、自分はレズビアンだと告白したしおりを元夫が激しく非難した際に超治は自分もゲイであると暴露し、以下のように語っている。

超治：私たちは一生人目を忍んで生きていかなきゃいけないわけ？外出するのも控えろってこと？それはこっちのセリフよ。あんたみたいなDV男こそ無人島に行って死ぬまでヤシの木殴ってれば？どうせ父親が母親を見下すような家で育ったんでしょうけれども、いい加減世界の中心は男じゃないってことに気づいたら？女から生まれない人間なんて一人もいないのよ？…あんたから見たらね、私たちは変かもしれないけど、こっちから見たらあんたの方がよっぽど変よ。でもね、心の痛みは一緒でしょう？私たちには違いよりも共通点の方がいっぱいあるの。些細な違いにこだわって相手を責めるようなこと、もうやめたら。

超治のこの発言からは、異性愛者が多数を占める社会において、相対的に自分たち同性愛者は特殊である、ということを認識しつつ、その差は些細なものだととらえていることが分かる。また、第七話の幼稚園の保護者たちに自分がゲイであると話すと、ヒロに伝える場面でも「今はもうゲイとか気にする時代じゃないし。」という発言をしており、ある程度社会的に認められるべきだとする考え方が見受けられる。

『偽装の夫婦』とは対称的に『同窓会』の風馬は自身の性指向を後ろめたいものであるかのように語る場面がいくつか見られた。例えば、第三話の七月と語り合う場面での「俺は生まれてきちゃいけなかった人間なんだ。」という発言や、第九話で嵐と話す場面での「（俺たちは）愛し合うこと自体一つの刑罰なんだぞ。時に甘美な刑罰。」という表現など、同性愛や同性愛者の存在は社会的に許されないものだと否定的に捉えていた。

『ごめんね青春!』の村井は『偽装の夫婦』の超治と同様に自分のセクシュアリティをある程度肯定的に捉えているようであった。第八話でクラスメイトに自分の性自認について語る場面では、ある時自分と他者で女子に対する意識が異なっていることに気付き、それ

がきっかけで自分の心が女性であることに気付いたと語っている。また、ドラマの序盤ではカミングアウトが行われていない段階から村井は白いうさぎのぬいぐるみを持ち歩く描写がみられることや、ドラマ中盤からは女子生徒の制服を着て登校する描写があるなど、自分のセクシュアリティを表出させるような行動がみられる。それに加え、ドラマ全体を通して村井が自らのセクシュアリティやそれにかかわる事柄に対して悩んでいるような描写は見られず、これらの点で村井は自分がトランスジェンダーで、心は女性であるということを肯定的に捉えていることや、自らの性自認を積極的に表現しようとしていることがわかる。

そして『ラスト・フレンズ』の瑠可は第五話で精神科医に自分の性について相談した際、以下のような会話をしている。

医師：自分が性同一性障害だと思うのはどのような点ですか。

瑠可：自分の体が嫌なんです。（医師：どういう風に？）小さいころから、女の子の服を着させられるのが嫌で仕方ありませんでした。幼稚園の時も、スカートが嫌でズボンをはいていました。

医師：今でもその違和感は続いていますか。

瑠可：続いてます。自分の胸を見るのが嫌で、シャワー浴びるときは目をそらしてます。

医師：相談相手や、好きな人はいますか？男の人は

瑠可：（男の人は）友達や仲間って感じます。恋愛感情を持ったことはありません。

医師：どんなことがつらいのですか。

瑠可：身近な人たちに、本当の自分を見せられないことです。好きな人や家族に、うそをついて暮らしてる。それが苦しいんです、時々たまらなく。

この会話から、瑠可は自らが女性であることに違和感や嫌悪感を抱いており、また、そういった性の悩みを周囲の人々に隠していることへ罪悪感を覚えていることがわかる。一方で、瑠可はモトクロスの監督に女性扱いされることに強く反発している描写も多く見受けられる。これらの点で、瑠可は自らの性自認を受け入れ自己を表現しようとする一方で自分の性についてうしろめたさを感じていると考えられる。

それに対し『トランジットガールズ』のゆいは、自らの性指向に対しての明言は見られなかった。小百合から「どっちも好きなんですか？男も、女も」と聞かれた際にも「わからない」と答えており、レズビアンという単語や性指向に対する発言は無く、曖昧なままに物語が進行していった。

五つの作品における性指向・性自認に関する言及をまとめたものが表 1 である。この表からも分かるように、言及がなかった『トランジットガールズ』を除いた四作品では『偽装の夫婦』、『ごめんね青春!』と『同窓会』、『ラスト・フレンズ』とで対称的な結果となった。この結果は言動だけにとどまらず、そのキャラクターの行動や仕草にも現れてお

り、肯定的に捉えている方の作品では後述するカミングアウトや性別に関する表現もみられた一方で、否定的に捉えている方の作品では自らのセクシュアリティを徹底的に隠そうとする姿が見受けられ、この性指向・性自認に関する言及は、後述する他の観点にも関連する事柄であると考えられる。

	偽装の夫婦	同窓会	ごめんね青春!	ラスト･フレンズ	トランジットガールズ
性指向・性自認に関する言及	肯定的	否定的	肯定的	否定的	言及なし

（表４－１　性指向・性自認に関する言及）

第二節　男性性/女性性に関する表現

巴（2014）では、ゲイキャラクターはしばしば女性の様な装いや女性的な仕草や言葉遣いを用いて、より女性的に描かれることがあるとされていた。そこで、本調査では男性の分析対象キャラクターには女らしさ、すなわち女性性を感じる表現がないか、対して女性の分析対象キャラクターには男性性を感じさせる表現がないか分析を行った。その結果、そのキャラクターの身体的性別によって表現の度合いに差があることが明らかになった。

『偽装の夫婦』の超治は母親である華苗の前や、自分がゲイであることを知らない人の前では普通の男性として振る舞っているが、すでに超治がゲイであると知っているヒロと二人でいるときに、時折女性的な仕草や言葉遣いがみられた。特に、感情が高ぶった時には女性のような言葉遣いのいわゆる「オネエ言葉」で話すようになる。河野（2008）はオネエ言葉を『人称代名詞や感動詞、文末形式で女性専用形式を用いつつ、そこに毒舌表現による攻撃性が含まれるもの』という特徴を持った言語スタイルだと分析した。つまり、オネエ言葉とはは単に女性らしい言葉遣いというわけではなく、そこに皮肉や歯に衣着せぬストレートな物言いがなされているものであり、このオネエ言葉を用いることで男性的表現を回避し、オネエ言葉を使うことでオネエというキャラクターを表現し、また、受け手も彼らがそのようなキャラクターを守ることを期待しているのだとしている。この特徴に当て嵌まる言語表現が超治には多くみられたまた、驚いた時などの咄嗟の反応も女性的な仕草が強調されているように感じられた。

また、この女性的な仕草や言葉遣いはストーリーが進むにつれて描写されている場面が少なくなっていった。ストーリーの序盤では、一つの話の中に何度かその様な描写があったが段々と描写される場面の割合が減っていき、第八話以降はほとんどみられなかった。

『同窓会』の風馬はゲイキャラクターであるが、巴（2014）で挙げられていたような女性的な仕草や言葉遣いは見られなかった。バイセクシュアルである嵐に関しても同様である。ただ一人、嵐の友人である潮という人物が女性的な仕草や言葉遣いをしていたが、潮は登場回数が少なくセクシュアリティが不明であるため、今回は分析の対象にはしないこととする。

『トランジットガールズ』のユイは、身なりや言葉遣い等に特別な演出はみられず、レズビアンのキャラクターだからといった何かしらの特徴づけは無かったように見受けられた。

『ごめんね青春!!』の村井には、オネエ言葉を用いた言動は見られなかったが、クラスメイトへのカミングアウトの前後で言葉遣いに変化がみられた。具体的に言えば、カミングアウト以前は、一人称が「俺」、あるいは「僕」であったが、カミングアウト後は「私」へと変化している。また、カミングアウト後は女性的な言葉遣いが多くみられるが、これは河野（2008）で示されている「毒舌表現による攻撃性」はないため、オネエ言葉には該当しないと考える。

『偽装の夫婦』や『ごめんね青春!』とは対称的に、『ラスト・フレンズ』の瑠可は一人称は一貫して「私」であり、特徴的な言葉遣いや服装はみられなかった。髪は短髪で、スカートを着用したり華やかな色の服を着るなどの女性らしい恰好をすることはなかったものの、「スカートをはかない＝男性的である」とはいえないため、瑠可に関しては、男性らしい、あるいは女性らしいといった性別を意識した表現は見受けられなかった。

以上の内容をまとめると表 2 のような結果となった。男性のキャラクターで女性的な表現がみられたもの、あるいは女性のキャラクターで男性的な表現がみられたものを〇と、その様な表現が一切見られなかったものを×で示している。男性の性的少数者が登場する作品では、『同窓会』を除いた二作品で共通して女性的な言動や仕草、言葉遣いがみられた。

一方、女性の性的少数者の登場する作品においては男性的であると断言できるような表現はみられなかった。『ラスト・フレンズ』の瑠可は、髪が短いことやスカートのような女性らしいと言われる服装をしていなかったことなどは、女性らしさを感じさせないための表現である可能性があるが、女性的ではないことがすなわち男性的であるとは言えず、男性性に関する表現には該当しないと考える。

	偽装の夫婦	同窓会	トランジットガールズ	ごめんね青春!	ラスト・フレンズ
男性性/女性性に関する表現（具体例）	〇（オネエ言葉）	×	×	〇（女子生徒の制服を着用）	×

（表 4-2　男性性/女性性に関する表現）

第三節　恋愛の成就

巴(2014)において、同性愛は成就せずに終わる「悲劇的結末」をたどるとされていたが、本調査で分析を行った作品においては、その流れと一致しない結末をたどった作品が複数見受けられた。また、恋愛は成就しなかったものの、「悲劇的結末」と捉えがたいものもみられた。

まず初めに『偽装の夫婦』についてだが、分析をおこなうにあたって物語終盤の展開についてあらかじめ紹介しておくこととする。ヒロはゲイであることを隠すためのカモフラージュとして、超治と夫婦関係を築いていたが、その生活の中で次第に超治にたいして好意を募らせていく。そして、恋愛と結婚は別だと言って超治が弟子丸に好意を寄せている様子を目の当たりにしたり、自分は超治に女性として愛してもらえないということを思い悩んだ末にヒロは超治に、好意を抱いていることを打ち明け、離婚を申し出る。超治も離婚を受け入れ別々に暮らすことになり、ヒロはしおりと、超治は弟子丸というそれぞれの同性のパートナーとの生活を始める。しかし、数年後に再会した超治とヒロは、再びともに暮らしていくことを望み、それぞれのパートナーには別れを告げて再婚したところで物語が終結する。

『偽装の夫婦』は、同性愛者である超治が母親にゲイであることを隠すために偽装結婚をするところから始まるため、物語の当初は異性愛的な要素が強い。しかし中盤から、超治は宅配便の配達員である弟子丸という男性に好意を寄せるようになり、物語の終盤でヒロが超治に婚姻関係の解消を申し出た後には、超治は弟子丸と交際を始め、この時点では恋愛が成就しているといえる。しかしその後、超治は自発的にヒロとの復縁を望み、弟子丸とは破局することになる。一度は恋愛を成就させているが、最終的な物語の結末としては、同性愛は破綻し、同性愛者のキャラクターであるにもかかわらず、異性の女性と結婚する形で終結するのである。同性愛が破綻し、異性との生活を始めるという点においては、巴(2014)で述べられていた異性愛規範的な要素がこの作品においても強く影響を与えているのではないかとも考えられるが、弟子丸との破局は超治の自発的な行動の結果であることから、叶わない恋を意図している「悲劇的結末」は厳密には当てはまらないと考える。また、異性愛規範的な結末でありながらも、最終話の終盤では同性カップルへインタビューしている様子を演出の一つとして用いるなど、同性愛は叶わないものばかりではないことを強調しているかのような結末となっていた。

それに対して『同窓会』は、「悲劇的結末」によって同性愛が破綻して物語が終結した。風馬は、七月と夫婦関係でありながらバイセクシュアルの少年・嵐とも関係を続けていたが、嵐のアウティング[8]により七月に関係がばれてしまう。しかし七月は、風馬がゲイであることや、嵐と親密な関係であることを許容し、嵐も含めて三人で生きていこうとする。しかし最終回の終盤において、嵐が突然見知らぬ男にボーガンで撃たれて悲劇的な死を迎えることとなる。風馬は物語が始まった当初は康介に恋愛感情を抱いており、その感情を押し殺して結婚をするという描写はまさしく「叶わない恋」を表現しているのであると考

えられる。また、その後嵐と関係を築き、七月によって共に生きることを認めてもらった場面は恋愛が成就したといえるが、嵐の死によって強制的にその恋愛は終わりを迎えてしまうことは、同性愛が叶わない恋であることをより強調しているといえるだろう。

このように『偽装の夫婦』と『同窓会』は異性と婚姻関係を結ぶというストーリー展開の酷似した作品で、同性愛が最後に破綻して終焉を迎えるという点も一致していたが、その同性愛の破綻が意味するものには違いがあるように見受けられた。

『ごめんね青春!』に関しては、ゲイキャラクターの二作品とは対称的な結果が得られた。その恋愛描写を分析するにあたり、事前に把握しておくべき物語のストーリー展開について紹介しておくこととする。以下がその詳細である。

この物語は、仲の悪い男子校と女子校が将来的に合併し共学校となるために、試験的に実施した共学クラスが舞台となっている。共学クラスは二つあり、一つは物語の主人公である原が担任をするクラスで、もう一つは蜂矢という女性の教師が担任をしているクラスである。分析対象である村井は原のクラスに在籍しており、村井の相手である半田は蜂矢のクラスの生徒である。共学クラスが設けられた当初は男女の対立が激しく、学校の合併に反対する生徒もみられたが、文化祭やその他の様々な交流を通して打ち解けていき、共学クラスの生徒たちは次第に、合併を反対する立場から推し進める立場へと変わっていく。

村井は物語の当初からクラスメイトの半田豪（以下：半田）に好意を抱いていたが、共学クラスになったことで女子との接点ができ、半田に好意を持つ女子が現れてしまう。また、相手の半田は当初は異性愛者で、ある女性に好意を寄せていたが失恋する。その後、半田に好意を寄せていたその女子と交際に発展するが、散々に振り回され精神的に疲弊し、「自分がゲイである可能性に賭ける」と言い、村井の好意に応じる。ここまでの村井が半田に思いを寄せる描写や村井と半田が交際を始める場面などはドラマ内ではほとんど描写されなかったため詳細は不明であるが、村井の恋愛は成就したといえるだろう。その後の交際の様子もほとんど描写されなく物語が進行していったが、村井が学校では女子生徒の制服を着て過ごしていることが父親にばれてしまい、父親が学校に乗り込んできた場面では半田が村井をかばう様子が見受けられ、物語の終焉までの間に破局したような描写はみられなかった。

ゲイのキャラクターを扱った作品ではどちらも同性愛が破綻し、同性愛者ながらも異性愛的な結末を迎えていたが、この作品で村井は恋を成就させている。これは、この作品のメインストーリーが主人公である原の過去の清算と、原の恋愛の成就であり、村井の恋が成就し半田と交際をすること自体が物語にそれほどかかわるものではないことや、最終的に原が好意を寄せていた相手と結ばれることで異性愛要素によって物語が終結し、村井と半田の恋愛はあくまで構成要素の一部に過ぎないことから、交際関係を破綻させる必要が無かったためではないかと考える。

『ラスト・フレンズ』の瑠可は友人の美知留に対して恋愛感情を抱いていたが、それを美知留に告げようとはせず、美知留が瑠可の気持ちに気付いた後も関係が進展することは

なく物語が終結する。しかし最終的に瑠可は自ら望んで美知留と、瑠可の理解者であるタケルとシェアハウスで再び暮らし始めるという結末となっており、瑠可が美知留に好意を伝えることはせず、片思いのままでいることを選んだという点では巴(2014)で述べられている要素と合致しているように見えるが、美知留を傍で支えたいと望んでいたのが最終的には叶っていることを踏まえると、この作品に関しても「悲劇的結末」とは異なるように思われる。

『トランジットガールズ』では、両親の再婚がきっかけで義理の姉妹となったゆいは、物語の当初から小百合に好意を寄せるが、亡くなった母のことが忘れられず、父親の再婚に乗り気ではなかった小百合に冷たく突き放されていたが、ゆいのアプローチによって段々と親密になっていき、二人は恋人関係になる。しかし、急激に仲良くなった二人を怪訝に思った母親が、二人が恋人関係であることに気づいてしまい、その結果、両親の再婚は取りやめとなり、ゆいと小百合は離れ離れになってしまう。その後、初めて出会った神社で再会した二人は手を繋いで歩きはじめるという終わり方となっており、途中両親によって引き離されることはあったものの、最終的には復縁したかのような描写がなされており、恋愛は成就したと捉えることが出来る。この点からこの作品も『ごめんね青春!』同様、「悲劇的結末」のパターンに合致しない結末となっている。

これまでの分析をふまえると、表3のような結果となった。最終的に分析対象のキャラクターの恋愛が成就したものは〇、成就はしなかったが『悲劇的結末』とは言い難いものは△、成就せず『悲劇的結末』を迎えたものを×で表記している。巴（2014）で扱った同性愛の作品ではすべての作品がこの『悲劇的結末』を迎えたとされていたが、本調査で視聴した同性愛やトランスジェンダーの作品においては、成就したもの、また成就しなかったが悲劇的ではないものなど結末の描かれ方に幅があり、巴（2014）の結果と合致したのは『同窓会』だけであった。

	偽装の夫婦	同窓会	ごめんね青春!	ラスト・フレンズ	トランジットガールズ
恋愛の成就	△	×	〇	△	〇

（表4－3　恋愛の成就）

第四節　アウティングとカミングアウト

カミングアウトがどのような物語の展開の中で、誰に対してなされるのか、また家族やその他の登場人物とでカミングアウトの描写に差がみられるのか分析を行った結果、一つの作品を除いたほぼすべての作品で周囲の人間や家族に対してカミングアウトをする描写がみられた。また、カミングアウトへ至る物語の展開として、幾つかの作品でアウティングの描写がみられた。

『偽装の夫婦』の超治は、第一話で偽装結婚を頼む際にヒロに対し躊躇なくカミングアウトした他、好意を抱いている相手に対して酒に酔った勢いで告白する場面や、主要な登場人物ではないキャラクターに対してもカミングアウトをする場面があるなど、他の作品と比べてカミングアウトの困難さはさほど高くないように描かれていた。しかし、超治は母親である陽村華苗（以下：華苗）にカミングアウトすることに対して消極的で、物語の中でヒロは何度も超治にカミングアウトを促す場面がみられたが、そのたびに超治ははぐらかしており、また、偽装結婚した理由も末期がんである華苗に結婚して幸せな自分を見せ、安心してもらうためであったことからも、少なくとも物語の終盤にさしかかるまで、華苗に自分がゲイであるとカミングアウトをする予定はなかったことが窺える。また、職場の同僚たちに対しても自らの性指向を明かしていなかったが、超治に好意を寄せていた同僚の女性が超治の性指向を偶然知ってしまい、半ば逆恨みのような形でアウティングがなされる。その結果、超治は働いていた幼稚園で保護者に対して自らの性指向を明かすことになり、結果的に退職せざるを得ない状況となった。

『同窓会』では、第五話の康介が「ホモ狩り」をしている集団に襲われていた風馬を助け、自分の家に連れて帰る場面である。康介の家に連れてこられた風馬は、カミングアウトする前に包丁を手に取り、その包丁を自分の首にあてて死のうとする。それを康介が必死に止めると観念したように風馬は自分がゲイであることや、康介に恋愛感情を抱いていたことを打ち明けていく。カミングアウトするより先に死のうとしたのは、第一項で述べた同性愛者は社会的に許容されるものではないという認識から、カミングアウトをすることに抵抗があったからではないかと考えられる。この場面において、カミングアウトをすることは死ぬことよりも覚悟がいることのように描写されている。また、康介以外の登場人物たちへのカミングアウトは、アウティングによって引き出されている。風馬と風馬の友人たちがそろって家で食事をするという場面で嵐が風馬と関係を持っていることを暴露し、その結果妻である七月や他の人物たちに知られることとなる。また、『同窓会』については家族に対するカミングアウト物語の中ではなされなかった。物語の途中で風馬と嵐が二人きりで部屋にいることに気付いて母親が二人の関係を疑うという場面があったが、七月と協力して取り繕って事なきを得ている。　『ごめんね青春!』では周囲へのカミングアウトについて、以下のような描写がみられた。

村井：僕はゲイです。ゲイっていうか、心が女子なんです。男子が好きです。女子と一緒にいる方が楽なんです。ずっと、ずっと隠してました、ごめんなさい。

（クラスは一瞬静まり返る）

女子生徒：知ってる。

（戸惑う村井）

女子生徒：あれでしょ、トランスジェンダー。逆に今更って感じだよね。

村井：うそー！

女子生徒：だって三女の制服着てるし。

村井：（嬉しそうに）そう、共学クラスに勇気を出して着てみたの。

男子生徒：いつから（女子の制服着て来てた）？

村井：先週から。絶対突っ込まれると思ってたのにみんな何も言わないから、気を使って見て見ぬふりしてるんだと思ってた。

男子生徒：（誰も何も言わなかったのは）普通に似合ってるからじゃね？

男子生徒：学ランより全然いいよ。

村井：じゃあ、ずっとこの制服着ててもいい？

（クラスメイトに受け入れられる）

村井：正直に話してよかった。（原に向かって）抗弁に神宿りました。

これは、第七話で村井がクラスメイトに自らの性自認について打ち明ける場面である。村井はカミングアウトを行うが、クラスメイトは村井の普段の様子から、彼がトランスジェンダーであると既に認識しており、村井のセクシュアリティや女子の制服を着て登校することを受け入れている。このことから、クラスメイトがある程度村井のセクシュアリティについて理解していたために比較的カミングアウトしやすい環境が整っていたと言える。そういった意味ではカミングアウトする困難さはある程度軽減されていると考えられる。しかし、家族に対するカミングアウトに関してはこの限りではなく、クラスメイトへのカミングアウトを終え安堵する村井に、クラスメイトの一人が「でもご家族は？」と問いかけ、村井は「それは大丈夫、駅で着替えてるから。」と答えるシーンがある。このセリフから、クラスメイトへのカミングアウトを終えてもなお親に対しては自分のセクシュアリティを隠したい意図がうかがえる。

また、第八話で村井の父に、村井が隠れて女子生徒の制服を着て通学していたことがばれ、学校の理事長である父が学校に乗り込んできて担任の原たちを怒鳴りつけてくるシーンがある。そのシーンではもう一人の担任である蜂矢が、村井が性同一性障害ではないかと言っても聞き入れず、息子が性的少数者であることに対して激しい拒絶を示していた。その後、村井は父親と和解するまでの間、一時的にではあるが男性としての振る舞いや恰好を強制されていた。

『ラスト・フレンズ』の瑠可は、当初周囲の人間に対しても、家族に対しても、カミングアウトをしておらず、自らの性自認を隠そうとする表現や誤魔化そうとする言動がみられた。家族に対しても自らの性のことを打ち明けておらず、家族のもとに瑠可の性のことが暴露されている手紙が届いた際にも、職場で妬まれているだけと誤魔化している。しかし、美知留に執着し瑠可に敵意を抱いていた美知留の恋人によって執拗なアウティングを受けた結果、共にシェアハウスで暮らしていた友人たちへ、それぞれカミングアウトし、理解を得ていた。家族に対しても同様にカミングアウトし、理解を得ていたが、カミングアウトをされた家族はそれを受け入れるまでに思い悩んだり、瑠可とぎくしゃくしているところが見受けられた。アウティングによってカミングアウトが引き出されたことや、第一項で述べたように瑠可は自らの性に後ろめたさを感じているようであることから、瑠可は『同窓会』の風馬と同様にカミングアウトを避ける傾向があり、アウティングはカミングアウトをせざるを得ない状況を作り出すために描写されたのだと考えられる。

『トランジットガールズ』に関しては分析対象キャラクターのゆいには、周囲へのカミングアウトのシーンは見られなかった。一方で、小百合の方は物語後半で高校の同級生たちに、姉のことが好きであるということを打ち明け、周りの人物から理解を得ている。姉のことが好きだということが、レズビアンであるというカミングアウトに相当するかという点はさておき、このカミングアウトに際してそれをしなければならない差し迫った状況というわけではなく、これは『同窓会』の風馬とは異なり、当人の意思によってなされたものだと考えられる。家族に対しては、小百合との関係が両親にばれた際にカミングアウトをしているが、これは説明を求められたために行ったカミングアウトであり、それまでのゆいと小百合の様子から、当初家族に打ち明ける意図はなかったのだとうかがえる。また、親の方もゆいと小百合の関係がきっかけで、親同士の再婚がなくなり家族関係が破綻してしまったことから、両親は二人の関係や同性愛を受け入れがたく感じていたのだと考えられる。

アウティングと、周囲・家族それぞれへのカミングアウトを作品ごとにまとめると表 4 のようになる。それぞれの項目ごとにその描写がみられたものを○、見られなかったものを×としている。アウティングの描写があったのは『偽装の夫婦』『同窓会』『ラスト・フレンズ』の三作品だが、どの作品でもこのアウティングがきっかけでカミングアウトが引き出されている。また、アウティングの描写が無かった『ごめんね青春!』『トランジットガールズ』の二作品においては、どちらも打ち明ける前に相手に自らのセクシュアリティがばれてしまうという事態が起こっている。このことから、アウティングや登場人物たちにばれてしまうといった何かしらのトラブルがカミングアウトを誘発させる、起爆剤の様な役割を果たしているのだと考えられる。

周囲の人間に対するカミングアウトがすべての作品に共通して見られたが、第一節で自らの性指向・性自認を肯定的に捉えているとされた『偽装の夫婦』や『ごめんね青春!』、性指向について言及の無かった『トランジットガールズ』におけるカミングアウトは自発

的なものも見受けられた。それに対し、性指向・性自認を否定的に捉えていた『同窓会』と『ラスト・フレンズ』は、前述したようにアウティング等のトラブルを経てカミングアウトがなされていた。これらのことからも、自らのセクシュアリティを受け止められているか否かで表現に差が生まれていることがわかる。その一方で、カミングアウトを受けた側の反応としてはどの作品でもそのセクシュアリティに理解を示すなど肯定的な反応がみられ、カミングアウトへの流れの相違に関わらず受け入れられるものとして描かれていた。

家族へのカミングアウトについてはどの作品でも避けようとする言動や行動がみられ、周囲の人間には比較的容易にカミングアウトが出来ていたキャラクターにおいても家族に対しては様子が一変しているものも見受けられた。また、家族の方も、カミングアウトをされる以前に、息子がゲイではないかと疑う描写がみられたり、カミングアウトをされた際の反応も、他の登場人物たちのようにすぐ受け入れ理解を示すのではなく、憤慨したり思い悩んだりする描写がみられ、カミングアウトをされる側の反応としても、他の登場人物たちのものとは異なるものとして描かれていた。

	偽装の夫婦	同窓会	ごめんね青春!	ラスト・フレンズ	トランジットガールズ
アウティング（誰から）	○（職場の同僚）	○（嵐）	×	○（美知留の恋人）	×
周囲へのカミングアウト（誰に）	○（ヒロや保、職場の人）	○（七月、康介）	○（高校のクラスメイト）	○（シェアハウスの住人達）	○（高校のクラスメイト）
家族へのカミングアウト	○	×	○	○	○

（表 4-4　アウティングとカミングアウト）

第五章　考察

第一節　男女における非対称性

男性のキャラクターには女性性が、女性のキャラクターには男性性が表現されているのではないかという観点のもと分析を行った結果、『偽装の夫婦』や『ごめんね青春!』といった男性のセクシュアルマイノリティ[9]を扱ったドラマでは、オネエ言葉や服装、仕草に一般的な男性とは異なる、女性的な振る舞いがみられた。一方で、女性のセクシュアルマイノリティを扱っている『ラスト・フレンズ』や『トランジットガールズ』においては男性的といえるような特徴的な仕草や言葉遣いはみられず、この観点においては男女で非対称の結果となった。

同性愛のキャラクターを扱った作品を比較してみると、『偽装の夫婦』では女性性を感じさせる描写があったのに対し、『同窓会』と『トランジットガールズ』ではそのような描写はみられなかった。女性キャラクターにおける男性性の表現は共通して見られなかったが、なぜ『同窓会』は『偽装の夫婦』と異なる結果となったのだろうか。筆者は、この差は放送年代差によるものであると考えている。『同窓会』は 1990 年代に放送された作品であるのに対し、巴（2014）で扱ったドラマ作品はいずれも 2000 年代以降に放送された作品であり、先行研究のドラマ作品よりも前に放送された作品であるために、先行研究で導き出された結論に当てはまらなかったのではないかと推測している。また、『偽装の夫婦』で見られたオネエ言葉や女性的な仕草は本来、性自認が男性であるゲイキャラクターには必要のない脚色であり、ゲイに対して間違ったイメージを植え付ける要因ともなり得る。にもかかわらず、なぜこのような脚色がなされているのだろうか。筆者は、昨今メディアで度々見かける「オネエタレント」のイメージが投影されているのではないかと考える。異性愛者が大多数であろう視聴者に対し、「オネエタレント」のような、見覚えがあり、かつコミカルなキャラクターに仕立て上げることで抵抗感を和らげる意図があるのではないだろうか。これは河口(2010)で述べられていたゲイの「ファンタジー化」に通ずる部分があると思われる。また、「オネエタレント」がテレビ番組に頻繁に登場するようになったのは 2000 年代後半ごろからであるため、この「オネエタレント」のイメージの投影が『同窓会』では見られなかったこととも矛盾しない。こうしたイメージの投影によって、本来は全く異なるセクシュアリティであるゲイと MtF のキャラクターが混同されて演出されているのではないだろうか。

次に、MtF と FtM の作品を比較してみると、『ごめんね青春!』では仕草や言葉遣いに自らの性自認が表現されていたのに対し『ラスト・フレンズ』では男性性を感じさせる描写はみられなかった。服装に関しても、村井は女子生徒の制服を着て過ごす描写がみられたが、瑠可は、スカートなどははかないものの、男性的といえるほど特徴的な服装はみられなかった。

このように男女で差がみられるのはなぜであろうか。女性キャラクターへの脚色が男性のセクシュアルマイノリティのキャラクターに対して顕著でないのは、男性的な言葉遣いや仕草が「オネエ言葉」のように世間一般の中で確立されていないからではないかと筆者は推測する。スカートを履かないことや髪が短いといった特徴は調査対象作品でも見受けられたが、女性的ではないことがそのまま男性的な特徴となり得るとはいいがたい。女性は仕草や振る舞いに特徴があるにも

かかわらず、男性にはその対となるものが無いのである。このような、世間一般における男女イメージの差が、セクシュアルマイノリティを描くうえでの男女の非対称を生み出しているのではないだろうか。

第二節　異性愛と交錯する恋愛

巴（2014）ではゲイのキャラクターの恋愛は「悲劇的結末」を以て成就せず終結するとされていたが、今回の調査においては『同窓会』以外の作品では当てはまらなかった。他の四作品は恋愛が成就した形で終わる、もしくは成就はしないが近しい関係を継続するなど「悲劇的結末」とはいいがたい結末であった。『同窓会』とその他の作品で結末に差が生まれたのはなぜだろうか。筆者は、ドラマ間の放送年代差が一因として挙げられると考える。『同窓会』は 1990 年代に放送されたドラマであるのに対して、視聴した他のテレビドラマはいずれも 2000 年代後半以降の作品であった。第一節でも年代差によって分析結果が異なる可能性について論じたが、恋愛の観点においても時代差の影響はあると筆者は考える。なぜなら、この 1990 年代から 2000 年代における約 10 年の間に性的マイノリティとされる人々をとりまく環境が大きく変化したためである。2000 年代に入ってから世界各国で、同性婚やパートナーシップ制度などの法整備が進められており、この 10 年の間に性的マイノリティとの共存への歩みが進められてきた。このような時代の変化をフィクション作品であるテレビドラマにおいても反映している可能性は十分に考えられる。

また、年代差の他に、恋愛が成就するか否かという点においては対象キャラクターが関わる異性愛の存在が影響しているのではないかと考える。『偽装の夫婦』と『同窓会』では、同性愛者であるキャラクターが異性と結婚する描写がみられ、その婚姻関係は物語の終焉時においても継続されている。つまり、それらのドラマは同性愛をテーマとして掲げながらも異性愛規範的要素が根底にあるといえる。この異性愛規範的な要素と衝突する同性愛は、異性愛的な結末を迎えるために淘汰されていったのではないだろうか。しかしながら、『偽装の夫婦』に関しては超治が自ら異性愛的な結論に至るため、悲劇的要素が和らいだのではないかと考える。その他の三作品においても、対象のキャラクターに恋愛感情を抱くキャラクターは存在するが、それらのキャラクター達は対象キャラクターから元々恋愛相手として認識されておらず、また、対象キャラクターからカミングアウトをされるなどの経験を経て、よき理解者としての立ち位置にとどまる存在となり、同性愛と衝突することなく物語が進行していくため、最終的に同性愛が成就する、もしくはそれに近しい結末となったのではないかと考える。

このように、同性愛やその他の性的マイノリティを扱いながらも、異性愛規範的要素が物語の展開に大きく影響を与えている背景には、第一節で述べた過度な脚色と同様に、視聴者にとって受け入れやすく違和感の少ないものに仕上げる意図があるからであると筆者は考える。性的マイノリティを扱いながらも異性愛的要素を強く映し出す、また、反対に異性愛要素で占める中にも性的マイノリティに関する表現を残す、といった演出をすることによって、異性愛者が多数であろう視聴者も共感することが出来る物語にしているのではないだろうか。

第三節　カミングアウトの壁

第二章第四節で提示したアンケート調査の結果と比較しつつ考察を行っていく。アンケート調査では友人へのカミングアウトに比べ、家族へのカミングアウトをした割合は低く表れていたが、今回の視聴分析においても周囲の人物へのカミングアウトと家族へのカミングアウトでは、性的少数者のキャラクターの行動に差がみられた。自らの性自認・性指向を受け入れているか否かに関わらず、家族へのカミングアウトは避けようとするのである。これは、アンケート調査の結果とも合致するため、テレビドラマでもカミングアウトに関しては現実に即したかたちで描いているのだと考えられる。

家族に対するカミングアウトが、他の登場人物たちへのそれより抵抗感があるように描写されているのはなぜであろうか。筆者は、家族、また、アンケート結果で同等であった職場は、性的少数者の生活や環境に影響を与えうる存在であるからだと考える。自らの生活やとりまく環境に影響を及ぼす存在であればあるほど、カミングアウトをして理解してもらえなかった場合のリスクは大きくなるだろう。実際に、『偽装の夫婦』の超治は、カミングアウトの末働いていた幼稚園を辞めざるを得ない状況となった。また、『ごめんね青春!』の村井においても、女子生徒の制服を着ていることが学校の理事長でもある父親にばれてしまい、激高した父親は男子校と女子校の合併話を白紙にし、試験的に共学クラスだった村井のクラスは強制的に分断されてしまっていた。身近な存在であればあるほど、カミングアウトによって受ける衝撃は大きいと考えられ、生活に関わる存在であるほど、カミングアウトした人自身への負担が大きくなるのではないだろうか。このような考えから、失敗した際のリスクが大きいと思われるカミングアウトについてはより慎重になったり、カミングアウト自体を避ける傾向があるのだと推測する。また、家族や職場をそれぞれコミュニティと捉えた場合に、そのコミュニティの秩序を保ち平穏を維持するために、混乱を招くかもしれないカミングアウトという行動を避けているのではないかと捉えることもできるだろう。

これらのことから、家族や職場の人に対するカミングアウトと、そうではない間柄の人に対するカミングアウトには大きな隔たりがあることが明らかとなった。そしてそれは、フィクションであるテレビドラマにおいても強く反映されているのである。

本調査によって、性的少数者のキャラクターを扱うテレビドラマは、多様なセクシュアリティを許容し始めている世の風潮に倣い、それまで固定化されていた悲劇的な描かれ方から変化しつつあることが明らかとなった。しかしその反面、異性愛規範的な要素は今だ根強く残っており、ドラマ全体を支配するこの異性愛規範によって、性的少数者の恋愛のストーリーは成しえないものとして表現されているのである。このような変化しつつある部分と未だ変わらず残っている部分が混在している背景には、現実の性的少数者像と、描き手や受け手となる視聴者のイメージする性的少数者像に齟齬が生じていることが考えられる。この齟齬を解消するためには、性的マイノリティの更なる可視化や、一つ一つのセクシュアリティに対する正しい理解が必要となり、理解と周知を図るうえでメディアの発する情報は今後ますます重要となるだろうと筆者は考える。

注釈

注１レインボーパレード

性的少数者とされる人々が､差別や偏見のない社会の実現を訴えるために行っているパレード。

注２トランス

トランスジェンダーを指す。トランスジェンダーとは、身体的性別と自認する性別が異なる人々のことを指す。

注３LGBT

性的少数者を指す言葉。レズビアン（Lesbian）・ゲイ（Gay）・バイセクシュアル（Bisexual）・トランスジェンダー（Transgender）の各単語の頭文字を用いた表現。

注４カミングアウト

これまで公にしてこなかった自らの秘密を他者に打ち明けること｡本稿では特にセクシュアリティに関する情報を他者に打ち明けることを指している。

注５バイセクシュアル

男性と女性どちらにも性的に魅了を感じる性指向のこと。両性愛とも称される。

注６MtF

Male to Femaleの略で、身体的性別は男性だが、性自認は女性である人々を指す。

注７FtM

Female to Maleの略で、身体的性別は女性だが、性自認は男性である人々を指す。

注８アウティング

outing. 他者の秘密を暴露する行動をさす｡本稿においては特に他者の性的指向やそれに準ずるセクシュアリティに関する事柄を他者に暴露することを指している。

注９男性のセクシュアリティ

「ごめんね青春!」に登場する村井はMtFで性自認から考えると女性であるが、今回は便宜上身体的性別で区別し、男性のセクシュアリティとして扱っている。

参考文献

河口和也，2010，「クィアの可視化をめぐる諸問題：テレビ番組を事例として」『論叢クィア』3：24-37
河野礼実，2008，「テレビにおける男性の女性語使用-いわゆる「オネエ言葉」について」『国文』109：112～100
巴健太郎，2014，「テレビドラマから見る男性同性愛者の描かれ方　－社会学・メディア研究から見る同性愛－」2014 年度慶應義塾大学法学部塩原ゼミ卒業論文
http://shiobaraseminar.jimdo.com/works/2014%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E5%8D%92%E6%A5%AD%E7%94%9F-%E5%8D%92%E6%A5%AD%E8%AB%96%E6%96%87%E4%B8%80%E8%A6%A7/

参考 URL

NHK オンライン「LGBT 当事者 2600 人の声から」
https://search.yahoo.co.jp/search?fr=slv1-tbtop&ei=utf-8&search.x=1&p=%E3%82%AB%E3%83%9F%E3%83%B3%E3%82%B0%E3%82%A2%E3%82%A6%E3%83%88%E3%80%80NHK
TBS テレビ「日曜劇場『ごめんね青春!』」http://www.tbs.co.jp/gomenne_tbs/
日本テレビ「偽装の夫婦」http://www.ntv.co.jp/fake/
フジテレビ「TRANSIT GIRLS」http://www.fujitv.co.jp/transitgirls/
フジテレビ「ラスト・フレンズ」http://www.fujitv.co.jp/b_hp/lastfriends/